# S-4

## コロナ禍における心理学の実践－基礎心理学と人間性心理学の交差Ⅵ－

企画者・司会：宮田 周平[1)]
話題提供者：久羽 康[2)]、榎本 光邦[3)]、藤木 大介[4)]
1)鎌倉女子大学 児童学部 子ども心理学科、2)大正大学 心理社会学部 臨床心理学科、
3)群馬パース大学 教養部、4)広島大学大学院 人間社会科学研究科

keyword：コロナ禍、人間性心理学、交差

【はじめに】新型コロナウイルス感染症拡大(コロナ禍)は2年目を迎えたが、未だに収束の目途が立たない。あらゆる個人の日常行動の変容が求められるコロナ禍において、基礎心理学・人間性心理学がそれぞれの立場でどのように実践されてきているかを語り合うことで、心理学の新たな実践の形を模索する。人間性心理学の実践は、第39回大会準備委員会企画シンポジウム「新型コロナウイルス状況下での人間性心理学の実践」で示されたように、エンカウンターグループやフォーカシング、カウンセリング等の実践をオンラインでどのように進められるかに関心が向けられていた。一方基礎心理学ではオンラインでの実験や調査等の研究活動に関心が向けられており、人間性心理学と関心は異なるが、オンラインでどのように実践を進めるかといった共通の課題もある。また、企画者及び話題提供者は大学教員であるため、人間性心理学を専門にしているとしてもそれぞれ講義や研究指導等実際には基礎心理学に関連する実践も行っている。それぞれの実践は基礎心理学と人間性心理学に明確に分かれず、重なっている部分もあるだろう。本企画では、話題提供者からコロナ禍における心理学の実践(フォーカシング、カウンセリング、臨床実践指導、授業、実験、調査等)を人間性心理学と基礎心理学の視点から話題提供を行っていく。

【話題提供】

### 1. コロナ禍とフォーカシングの実践ーオンラインセッションについて考える

(久羽 康)

コロナ禍では対面での臨床実践や対話が制限され、私たちは否応なくオンラインで人とつながる工夫をすることを余儀なくされている。その状況の中で、私がフォーカシングやカウンセリングの実践において個人的に感じていることを、困った面(悪い面)も意外と良かった面も含め、お話しできればと考えている。

### 2. コロナ禍における大学教育の実践

(榎本 光邦)

2020年度は大学生にとって、当たり前にあるはずだったキャンパスライフが失われ続けた1年であった。コロナ禍の影響で、一度も登校することなく、1年を終えた学生もいただろう。本話題提供では、コロナ禍において私が携わった学生相談室の活動や大学院における臨床実習指導などの大学教育を実践するに当たって新たに取り組んだこと、これまでの取り組みを変えずに済んだことなどをお話ししたい。

### 3. コロナ禍で脚光を浴びるようになったオンライン手法の紹介

(藤木 大介)

認知心理学をベースとした言語情報処理や教授学習過程を主たるテーマとする私の研究室では、COVID-19の感染拡大に伴い、個別実験を実施できない時期があった。一方で、以前からオンラインでの実験や調査の方法の検討や、遠隔授業のインフラ整備等は行われており、コロナ禍を機に脚光を浴びるようになったといえる。本話題提供ではこれらのトピックに関する学術的知見について簡単に紹介したい。